

序

札幌学院大学人文学会長 中野徹三

1997年は、私共の人文学部が発足してから20周年に当たると共に、札幌学院大学がその最初の礎石を札幌市内中島公園の池畔に置いて以来の50周年をことほぐ年ともなり、この二重に記念すべき年に際して、種々の有意義な行事が催された。

本学の出発点となったのは、太平洋戦争敗戦の翌年（1946年）、軍衣を脱いだ復員学徒兵を中心とした青年たちが、平和で民主的な文化国家日本の建設をめざして、ほとんど徒手空拳で創設した「札幌文科専門学院」であった。

当時、北海道の高等教育機関には明治以来の本道開拓が持つ内国植民地的跛行性を反映して、ほとんど技術的理科系一本のみの教育が支配しており、クラーク博士の高いピューリタニズム的薫陶を一身に浴びつつ誕生した札幌農学校に始まる北海道帝国大学にも社会・人文系の学部はなく、僅かに小樽経済専門学校だけが、本道における唯一の文科系アカデミーたる地歩を辛うじて守り続けてきたにとどまる。

経済科、法科、文科の「三学科」を持つ「文専」はこうして、文字通り本道最初の文科系総合高等教育機関であり、またその名誉ある先駆者でもあった。男女共学を最初に実施したこと、昼間働く社会人のための夜間部を同時に開設したこと等も、その着想の先見性をよく物語るもの、というべきであろう。そしてこの「文専」を貫くところの、自由かつ清新で創造的、あくまでも人間中心主義な liberal arts の精神は、とりわけ文学と芸術を討究する「文学科」とその活動に、もっともよく代表された、といってよい。すぐれたユニークな多数の講師たちが文専の教壇に立ち、芸術における永遠の「詩と真実」を説いた。そのなかには文専創設者の一人南部芳明氏はじめ安斉七之介氏、和田徹三氏、柏倉俊三氏などの英文学者や松尾正路氏などの仏文学者がおられたし、また最近、私が知ったところであるが、かの伊藤整氏や詩人百田宗治氏も、短期間ではあるが、文専の専任教員として勤務されていたのである。

文専のこの豊かな伝統を継承して1950年、札幌短期大学が誕生したが、かの liberal arts の精神は、この本道最初の文科系短期大学の英語科とその豊かな一般教育のうちに継承された。これを証左するものとして、札幌短期大学は、昼間部（商学科・英語科）と夜間部（商学科）共に、二カ国語（英独または英仏）の二年間履修を必修として学生に課していたが、これは全

国の短大中、ほとんど類例のない試みであった。そして当時の学生諸君は、この厳しいながらも内容豊かな関門を、見事に突破して巣立っていったのである。

札幌学院大学人文学部の英語英米文学科は、文専文学科と札幌短大英語科のこの先駆性豊かな50年の歴史を継承して、今21世紀へと歩を進めつつある。幸いに現在、本学英語英米文学科は、研究と教育に極めて熱心なスタッフを多数擁し、学部20周年を期して、次の半世紀にふさわしい新たな飛躍を築くべく力を合わせている。

この時期にあたり、学外からの御寄稿2篇を含む13篇の特集論文と3篇の一般論文から成る本特集号が、人間科学科スタッフによる前々号(第60号)の特集「人間科学の現状と課題」に次いで、本学部の研究生生活の次代に向けての発展の、意義深い道標たらんことを、深く念願してやまない。